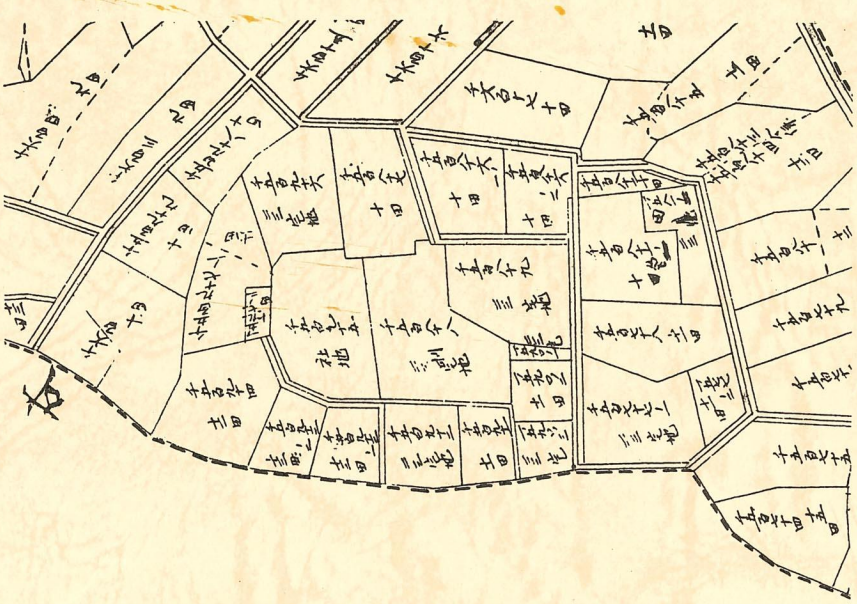
善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７

旧練兵場遺跡
四国学院大学構内遺跡
菊塚古墳



平成14年３月

善通寺市教育委員会

表紙挿図

仲多度郡善通寺町大字善通寺

第七番字大池東地図（部分）

（昭和２年９月調製）

【善通寺市教育委員会所蔵】

序

善通寺市には数多くの埋蔵文化財が残されており、これらが発掘調査されるたびに新たな発見があり、そして新たな謎の解明が始まります。

今回調査しました仙遊町「旧練兵場遺跡」・文京町「四国学院大学構内遺跡」・善通寺町「菊塚古墳」におきましても、多くの成果をあげることが出来ました。

旧練兵場遺跡では、弥生時代集落の様相を垣間見ることが出来ました。四国学院大学構内遺跡では、竈を持つ竪穴住居などが見つかるなど従来不詳であった遺跡の性格が確認できました。また丸亀平野で最大級の前方後円墳でありながら、実態がほとんどわかっていなかった菊塚古墳では、調査によって中・四国で２例目となる「石屋形」が発見され大きな成果をあげることが出来ました。菊塚古墳につきましては今後も継続して調査を行い、保存・活用のための基礎資料の蓄積を行なっていく予定です。

このたびの善通寺市内遺跡発掘調査事業実施にあたり、多大なご配慮・ご協力を賜りました関係者ならびに地権者の方々、また報告書刊行にあたりご指導を賜りました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成14年３月31日

善通寺市教育委員会
教育長　勝田　英樹

例　言

1．本書は善通寺市教育委員会が平成13年度国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。

2．本事業では善通寺市仙遊町（旧練兵場遺跡）において平成14年２月13日から同月19日まで、同文京町（四国学院大学構内遺跡）において同年2月18日から同月23日まで、同善通寺町字大池東（菊塚古墳）において同年３月４日から同月31日まで発掘調査を実施し、現地での調査中および調査終了後に各遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。

3．本書の執筆は善通寺市教育委員会　文化振興室　課長補佐　笹川龍一、同主事　海邉博史および関西大学大学院生　中里伸明が行なった。執筆分担は第１章を笹川が、第４章②【後円部の測量調査】を中里が、その他を海邉が行なった。編集は笹川の指導のもと海邉が行なった。各遺跡の実測や周辺部の測量調査は、笹川・海邉および下記の調査補助員が行なった。写真撮影は笹川・海邉が行なった。また本書に掲載した遺物の実測・トレースは、海邉および調査補助員が行ったほか、本田奈都子・渡邉淳子・中野麻理子各氏のご協力を得た。なお、遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵質、白抜きが土師質、網掛けが瓦質・磁器を表す。

4．事業実施および本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大なご指導・ご援助ならびに資料提供、ご助言を得た。記して謝意を表します。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・学校法人四国学院・四国学院大学考古学研究部・㈱高畑精麦・阿部泰之・大久保徹也・岡　敦憲・片桐孝浩・蔵冨士寛・蔵本晋司・佐藤竜馬・巽　陽介・松本和彦・松本豊胤・宮脇武一・森下英治・山田国孝（順不同・敬称略）

調査補助員：中里伸明（関西大学大学院生）・竹野裕二（関西大学文学部考古学研究室）・黒田　豪・名嘉真朝日・名本憲弘・蜂谷浩美・細川大介・松林　潤・寒川　修・土井辰宣・三浦雅裕・高松泰之（四国学院大学考古学研究部）

目　次

第１章　遺跡周辺の位置と環境……5
第２章　旧練兵場遺跡……10
① 調査の概要 ……10
② 遺　構 ……10
③ 遺　物 ……14
④ 小　結 ……18
第３章　四国学院大学構内遺跡……19
① 調査の概要 ……19
② 遺　構 ……20
③ 遺　物 ……20
④ 小　結 ……22
第４章　菊塚古墳……23
① 調査の概要 ……23
② 遺　構 ……24
③ 遺　物 ……28
④ 小　結 ……29
主要引用・参考文献……30
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　善通寺市遠景……5
第２図　調査地と周辺の主要遺跡……6
旧練兵場遺跡……6
第３図　調査区位置図……10
第４図　調査区平面図……11
第５図　調査区断面図……12
第６図　各遺構実測図……13
① SH-02　壁溝土層断面図
② SH-02　床面溝状遺構土層断面図
③ SH-01～02間土層断面図
④ SK-01土層断面図
⑤ SH-04遺構図

第７図　出土遺物実測図
四国学院大学構内遺跡……19
第８図　調査区位置図……19
第９図　調査区平面図および土層断面図……21
第10図　出土遺物実測図……22
菊塚古墳……23
第11図　周辺主要古墳位置図……23
第12図　後円部墳丘測量図……25
第13図　主体部検出範囲平面図および土層断面図……27
第14図　主体部検出範囲側面図……28
第15図　墳丘上表面採取遺物実測図……29

図 版 目 次

図版１－１　遺構検出状況（北から）
図版１－２　遺構面検出状況（北から）
図版１－３　SH-03断面（西から）
図版２－１　焼土坑１（南から）
図版２－２　土器15出土状況（北東から）
図版２－３　調査風景
図版３－１　調査前風景（南東から）
図版３－２　第１トレンチ全景（北から）
図版３－３　第１トレンチ土層断面（北西から）
図版４－１　SH-01竈検出状況（西から）
図版４－２　第２トレンチ全景（北から）
図版４－３　第２トレンチSD-03・SX-01検出状況（北から）
図版５－１　菊塚古墳遠景（航空写真）
図版５－２　墳頂部調査前風景（東から）
図版５－３　調査区全景（北から）
図版６－１　玄室検出状況（南から）
図版６－２　玄室検出状況（西から）
図版７－１　玄室検出状況（北から）
図版７－２　玄室奥壁北東側コーナー部分（南西から）
図版８－１　盛土残存状況（左端の黒い個所・北から）
図版８－２　円棟検出状況（南から）
図版８－３　調査風景

第１章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

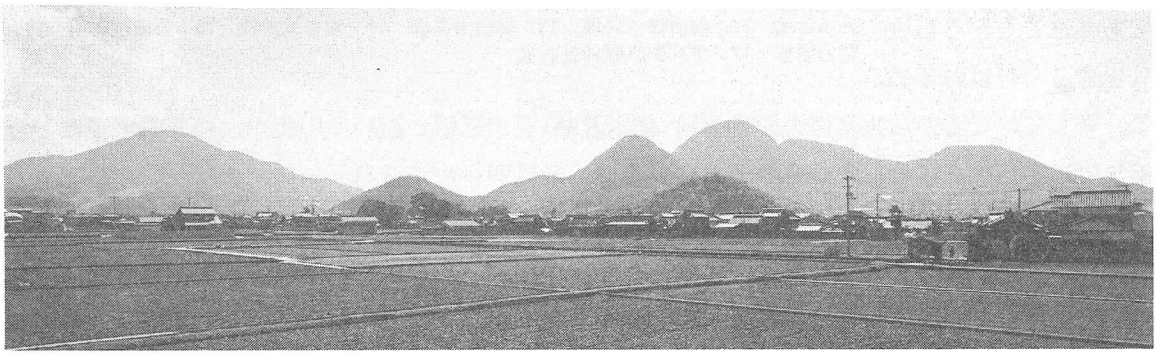
東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ケ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第Ⅰ様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は

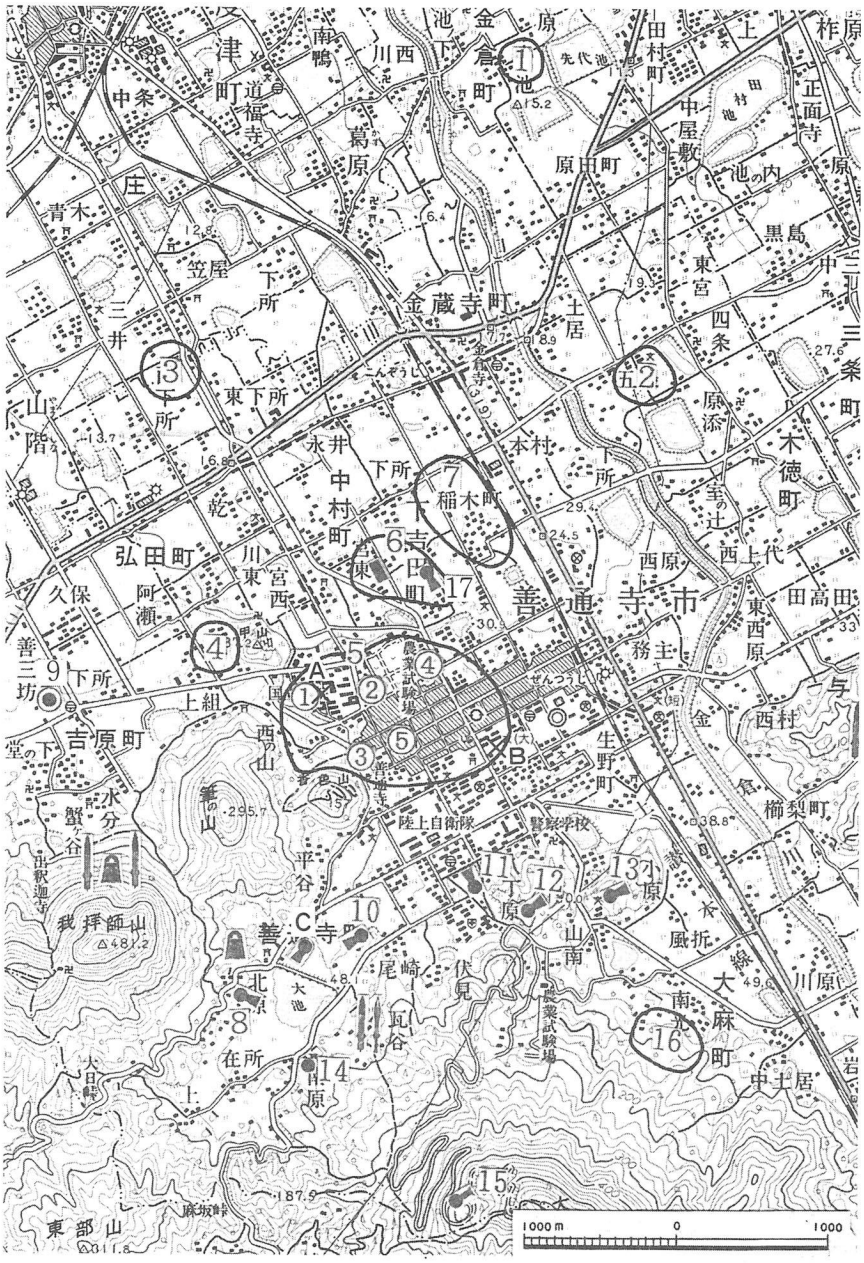


第１図　善通寺市遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山(この手前の小丘が甲山)・中山・火上山

２～３kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高５mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、吉原町から旧石器も確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約２～３万年前まで遡ることができるようである。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。



第２図　調査地と周辺の主要遺跡

【平成13年度調査】Ａ：旧練兵場遺跡　Ｂ：四国学院大学構内遺跡　Ｃ：菊塚古墳
1：中ノ池遺跡　2：五条遺跡　3：三井遺跡　4：甲山北遺跡　5：旧練兵場遺跡群（①彼ノ宗遺跡　②仙遊遺跡　③善通寺西遺跡　④仲村廃寺（伝導寺跡）　⑤善通寺伽藍）　6：九頭神遺跡　7：稲木石川遺跡　8：北原古墳　9：青龍古墳　10：王墓山古墳　11：丸山古墳　12：鶴ガ峰４号墳　13：磨臼山古墳　14：宮ガ尾古墳　15：野田院古墳　16：岡古墳群　17：下吉田八幡神社古墳

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、

古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査 が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡２棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、夥しい生活の痕跡が確認されている。特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓３基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

そして、国立病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

九頭神遺跡から北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年５月から昭和60年３月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、"大集落"というよりはむしろ"小国"が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣３口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣２口・細形銅剣５口・中細形銅鉾１口の計８口、我拝師山遺跡では計３カ所から平形銅剣５口・銅鐸１口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸１口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が潅漑治水事業などを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えこの地の勢力は更に発展を続けている。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区の古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山１号・２号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林古墳と丸山２号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高402m) のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛り土、後円部は積石墳で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鑵子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴が峰２号墳(消滅)・鶴ガ峰４号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計８基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共通したモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺(仲村廃寺)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、後に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末、宝亀五年(774)この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生する。平安初期、大同二年(807)に唐から帰朝した大師が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした貴族(佐伯)や善通寺の僧侶達が造り上げたも

のであるが、中には子孫のために経筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山１号経塚)が平成９年夏に確認され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元年(1558)には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ寺のうち五カ寺がある善通寺市は善通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治29年には旧陸軍第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29年３月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

第２章　旧練兵場遺跡

① 調査の概要

旧練兵場遺跡は善通寺市のほぼ中央、善通寺市仙遊町に所在し、遺跡は西を弘田川、東・南を中谷川で限られた東西1.2km、南北0.4kmを測る楕円形状の微高地に立地する。現在、遺跡の中心部には国立善通寺病院や独立行政法人四国農業試験場などがある。

調査区は平成12年度元興寺文化財研究所が発掘調査を行なった地点（市営西仙遊町住宅建設予定地）の南側隣接地に位置する（第３図）。市営住宅建設に伴い浄化槽を設置する計画があったため、遺構の確認を目的として調査を行なった。調査面積は約46㎡を測る。

第３図　調査区位置図（１：1,500）

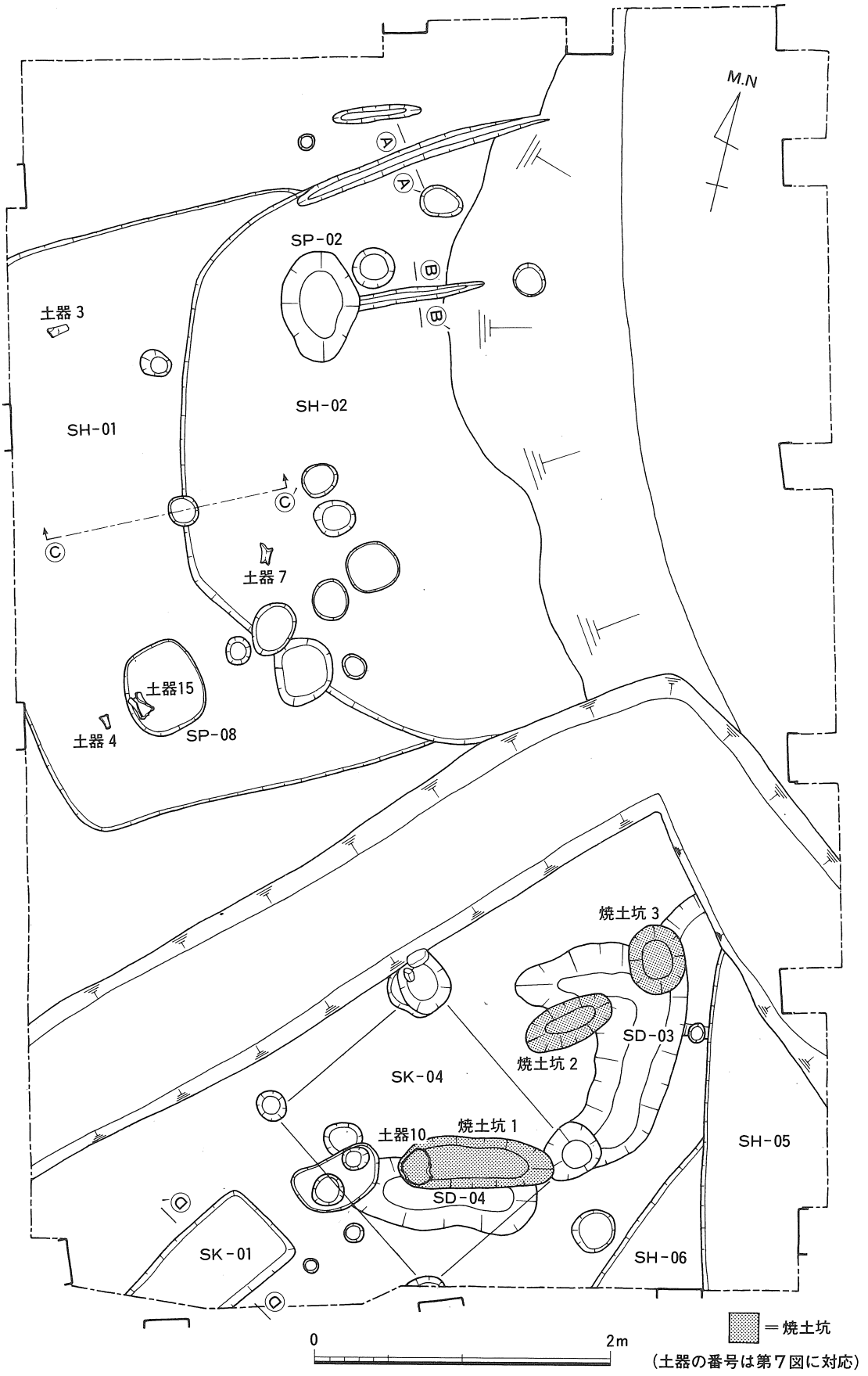
② 遺構

調査区の土層は表土を除いて４層に大別できる（第５図）。第Ⅰ層は淡茶褐色土層、第Ⅱ層は黄灰色土層、第Ⅲ層は黒褐色粘質土層、第Ⅳ層は黄褐色土層である。第Ⅰ層は陸軍練兵場時代の包含層、第Ⅱ層も練兵場時代の包含層だが、一部中世の遺物も混入する。第Ⅲ層は弥生時代中期から後期の包含層、第Ⅳ層は弥生時代の基盤層である。遺構面は第Ⅲ層を除去した段階で検出した。なお、調査終了後、下層の遺構・遺物を確認するため、遺構面よりさらに3.5mの深さまで機械掘削を行なったが、下層は旧河道となっており人為的な痕跡は確認することが出来なかった。遺構は基盤層が目立たないほど密集している。竪穴住居のほか、土坑、焼土坑、柱穴、溝などを検出した。以下、竪穴住居を中心に概要を記す（第４図）。

【竪穴住居・焼土坑】　竪穴住居は計６棟検出した（SH-01～06）。

SH-01　調査区中央西側で検出した。西端は調査区外のため検出できず、また東端の大部分は後述するSH-02との重複関係にある。このため正確な規模は不明であるが、南北3.9m、東西2.6m以上の隅丸方形の竪穴住居である。削平を受けているため、検出した遺構面から床面までの深さは約10cmしか残存していない（第６図－③）。また炉や壁溝、ベッド状遺構などは確認できなかった。ただしSH-01に伴うと思われるピットを計2基検出しており、これが住居の主柱穴になる可能性がある。床面の平均標高は22.6mを測る。

SH-02　SH-01の東端に位置し、SH-01を削平する形で検出した。一辺2.2mを測る六角形の竪穴住居である。東端は攪乱を受けて原型を留めていないものの、西側は比較的良好に遺存していた。北端の一辺には長さ180cm、幅８cm、深さ10cmの断面Ｕ字形の壁溝が直線的に残存していた。壁溝の内側約80cm～100cmの位置では、壁溝とほぼ同じ方向に長さ約90cm、幅10cm、深さ10cmの断

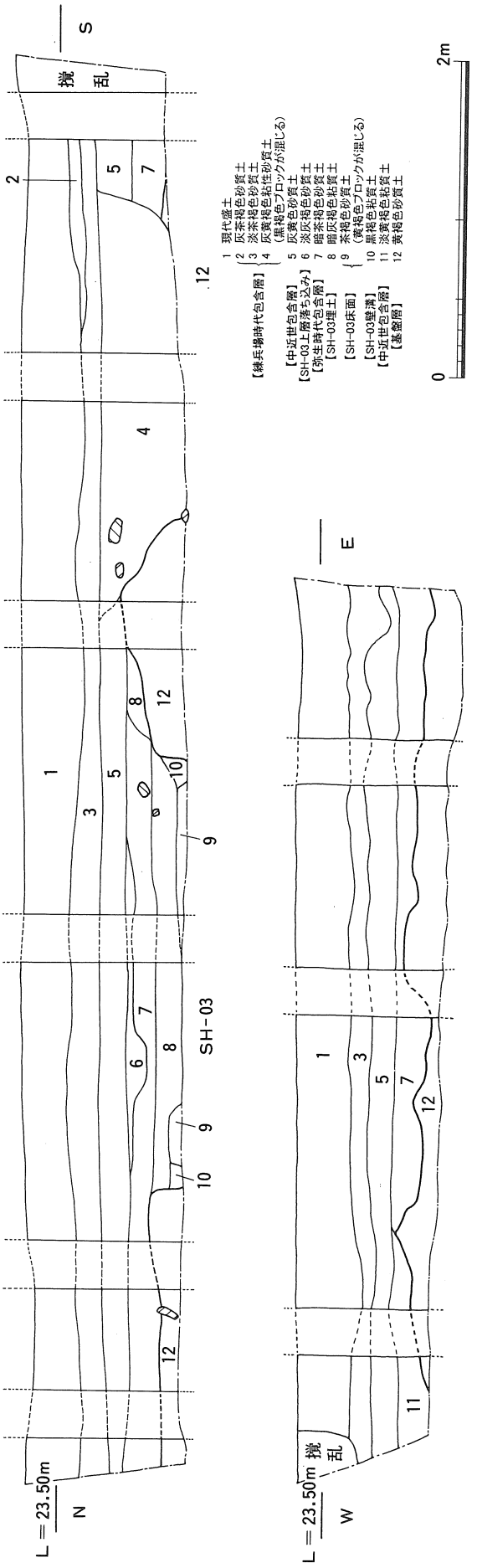


第４図　調査区平面図（１：40）

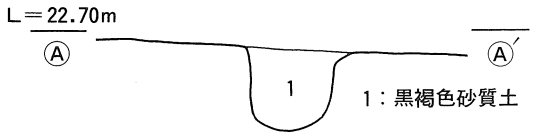
面V字形の溝を検出した。この溝は、おそらくベッド状遺構を区切るものと思われる。SH-02内には複数のピットが検出できたが、住居に伴う柱穴と判断できるものはなかった。床面の平均標高は22.75mを測る。

SH-03　調査区東壁やや北側から断面によって確認された。攪乱を受けていたため、平面的に確認することは不可能であった。よって平面的な規模は不明であるが、断面で観察する限りでは一辺2.8m以上の規模を測り、両端に断面U字形の壁溝を有する。住居内北側には、幅約40cm、高さ約８cmのベッド状遺構が北側に取り付く。ベッド状遺構は基盤層の削り出しではなく、盛土で築造されている。床面は、厚さ７cm程度の貼床が観察できた。床面の平均標高は22.7mを測る。主柱穴、炉などは確認することが出来なかった。

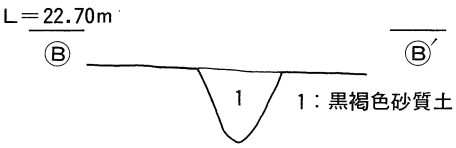
SH-04　調査区南側で検出された。北側は近現代の流路があり、東側をSH-05およびSH-06と重複しているため、平面形態は不明である。しかし焼土坑１を囲むように4つの主柱穴が確認できることから竪穴住居と判断した。各主柱穴の間隔は1.3m～1.6mを測る。焼土坑１は、平面は南北0.35m、東西1.06mの平面長楕円形を呈し、やや中心からずれた印象を受けるが、最も深い部分は西隅付近であり、主柱穴のほぼ中央に位置することになる。深さは最深部でも約15cm程度である。埋土は焼土が多く混じった褐色粘質土である。また、若干の炭化物も含む。底部の一部には被熱の痕跡が認められる。土坑内西側から弥生土器甕が出土した。以上のことから焼土坑１はSH-04に伴う炉と推定した。ただし当該期の炉は柱穴間の中央で正円に近い形態のものが多く、別の遺構に伴うものであった可能性も否定できない。焼土坑１の東側には、焼土坑２・３があり、埋土の状況が非常に類似している。



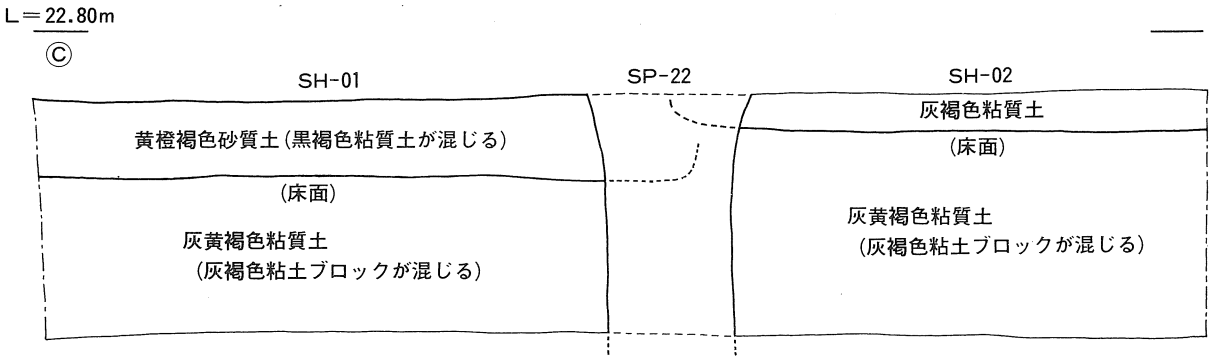
第５図　調査区断面図（1：40）



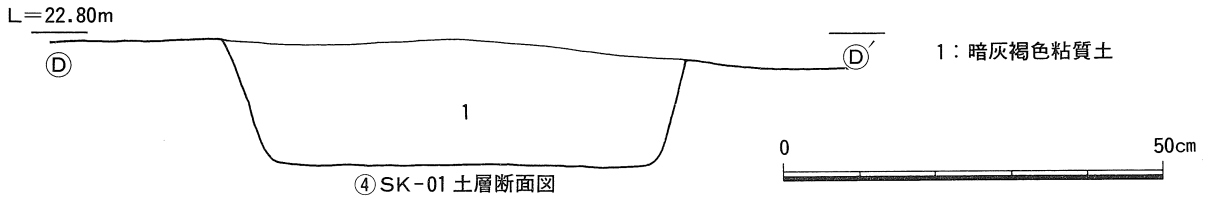
①SH-02 北側壁溝土層断面図



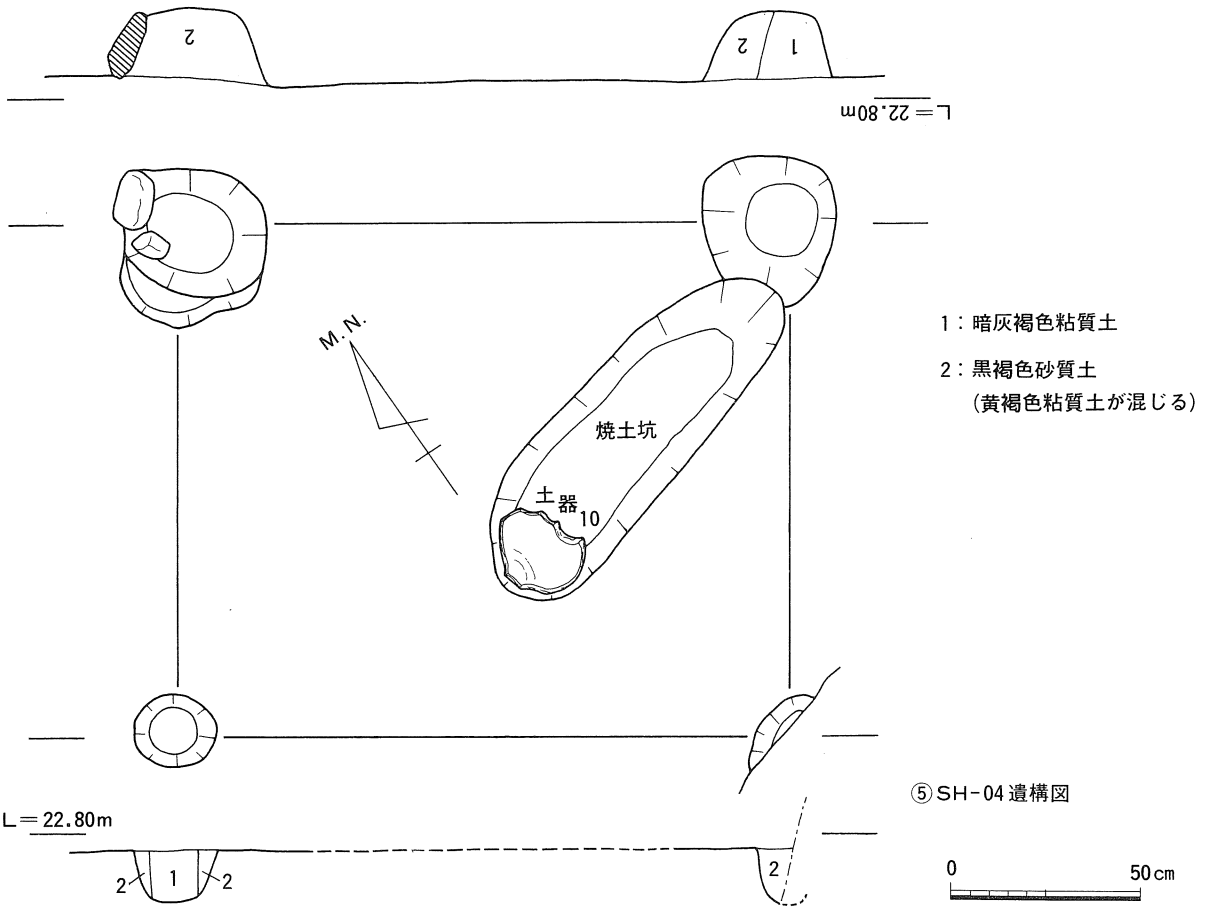
②SH-02 床面溝状遺構土層断面図



③SH-01～02 間深掘トレンチ土層断面図



④SK-01 土層断面図



⑤SH-04 遺構図

第６図　各遺構実測図（①～④ 1：10，⑤ 1：20）

これらも竪穴住居の炉であった可能性がある。

SH-05・06　調査区南東端で検出された。埋土の状況が直線的に入ることから竪穴住居と推定した。平面観察および調査終了後の掘削立会の所見から、SH-06が先行したと判断した。炉跡や柱穴など住居に伴う遺構は確認することが出来なかった。

【土坑】　土坑（SK-01）は、調査区南西隅で検出された。短辺0.62m、長辺1.0m以上の平面隅丸長方形の土坑である。深さは約0.2mを測り、底部は平底である。断面は単層で水平堆積であった。埋土中から少量の弥生土器細片が出土した。平面形および底部の形状から墳墓であった可能性がある。

【溝】　竪穴住居に伴うもの以外に、SH-04の東側にあるSD-03・04があげられる。SD-03は南北方向、SD-04は東西方向に伸びる。残存している形状では2条になっているが、本来は１条であったと思われる。断面は丸底、埋土中より少量の弥生土器片が出土した。位置的に竪穴住居に伴う遺構である可能性がある。

③ 遺物

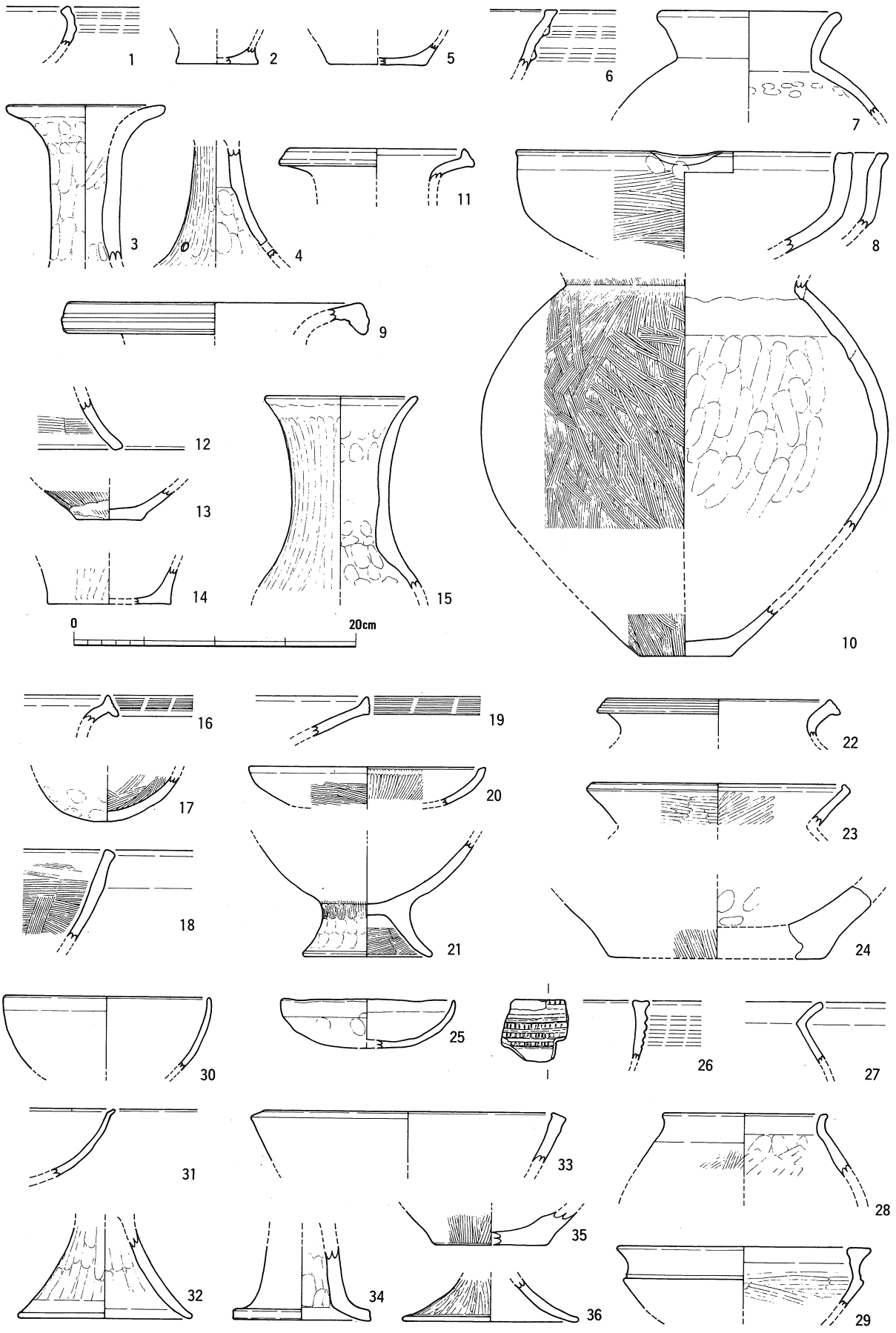
各遺構および包含層より多数の遺物が出土した。中世や近代の遺物も認められるが、大部分は弥生時代中期・後期の土器である。本報告では弥生土器のみを各遺構・包含層ごとに概要を記す。なお年代観については、森下英治氏の研究成果に準拠した[ii]。

【SH-01出土遺物】（第７図－1～4）　(1)は鉢で、内傾する口縁を有する。端部は平らに仕上げる。外面には３条の弱い凹線を施す。(2)は甕の底部で、底部外面にやや強いナデを施す。復元底部径5.9cm。(3)は支脚である。端部は若干外反する。内外面ともに不定方向のナデおよび指頭による押圧調整がなされる。また内面には絞り目が若干認められる。胎土は他の土器に比べて長石の比率が高い。また、同一個体と思われる端部が共伴しており、図上復元を行なった。先端部は外反し丸く収める。内外面ともに指頭による押圧調整が行なわれている。端部が一部しか残存していないため、あるいは上下が逆かも知れない。残存長11.2cm。(4)は高坏の脚部で３方向に透かし孔が穿たれている。外面は幅２～３mm程度の細かい縦方向のミガキを施す。上方はミガキが良好に観察でき、下方はミガキののちナデを行なっている。また外面に黒斑が残存する。内面は上方がナデ、下方が指頭による押圧調整が行なわれている。残存高8.2cm。

(1)(2)は弥生時代中期、(3)(4)は後期後半の年代が与えられる。

【SH-02出土遺物】（第７図－5～8）　(5)は壺の底部である。底は薄く、立ち上がりは明瞭である。内外面ともナデを施す。復元底部径6.9cm。(6)は細頸壺の口縁である。先端は平たく仕上げ、内外面共に若干肥厚する。外面には２条の貼付突帯を付した後、刻み目を施す。調整は内外面ともにナデを施す。(7)は壺の口縁から肩部上半まで残存する。頸部は外反する。端部は弱い端面を有すものの概ね丸く収める。肩部は張ることなく丸く胴部最大幅に続く。調整は外面がナデ、内面は頸部がナデ、体部が指頭による押圧調整のちナデを施す。復元口径6.6cm、残存高7.3cm。(8)は鉢である。口縁端部を外側に折り曲げて片口を作る。端部は直立する箇所と、外反する箇所の両方がみられる。剥離のため調整は不明瞭であるが、内外面ともに横方向のハケメによる調整が認められる。外面の片口部分には指頭による押圧調整とナデの痕跡が認められる。復元口径24.0cm、残存高7.2cm。

(5)(6)は中期、(7)は後期から終末期、(8)は後期前半の年代が与えられる。



第7図　出土遺物実測図（1：4）

【1～4：SH-01，5～8：SH-02，9・10：焼土坑1，11：焼土坑3，12～14：SP-04，15：SP-08，16～29：包含層上層，30～36：包含層下層】

【焼土坑１　出土遺物】（第７図－9・10）　(9)は壺の口縁である。端部外面に浅い2条の凹線を施す。復元口径22.0cm。(10)は甕の体部から底部である。体部と底部は接合できなかったが、出土位置や形状、胎土から同一個体と判断し図上復元を行なった。胴部は頸部接合部から下半部途中まで残存する。全体的な形状はやや上半部が張った球形を呈する。胴部最大径はほぼ中央付近である。胴部外面は12～13条／cmの細かい縦・斜め方向のハケメを施す。部分的には指ナデの痕跡がみられる。頸部との接合部はハケメの後に横方向のナデを施しているが、ハケメは残存している。内面は頸部付近が横方向のナデ、下側は上方向への指頭によるナデ上げによる調整が行なわれている。頸部内面には接合痕が認められる。底部はやや直線的に立ち上がる。外面は胴部と同様に縦方向の細かなハケメが下端部まで施される。内面はナデおよび指頭による押圧調整を施す。また不定方向の工具痕が残存する。底部外面には胴部と同様の細かな一定方向のハケメが観察できる。

(9)は後期前半、(10)は後期後半の年代が与えられる。

【焼土坑３　出土遺物】（第７図－11）　焼土坑３からは複数の遺物が出土したが、図化できたのは(11)のみである。(11)は頸部が直立する壺の口縁である。口縁端部は上方に拡張する。内外面共に強い横ナデを行なう。復元口径12.4cm。中期の年代が与えられる。

【SP-02出土遺物】（第７図－12～14）　SP-02は調査区北側、SH-02内にある平面が不整な楕円形状を呈するピットである。断面は歪なすり鉢状となる。位置的な関係からSH-02に伴う遺構と推定できる。(12)は台付鉢の脚部である。脚端部は丸く収める。残存高3.65cm。(13)は壺の底部である。平底で外面にはハケメが残存している。下端付近までハケメは施されているが、この部分はナデ消されている。(14)は甕の底部である。底部は平底で厚さは薄い。胴部への立ち上がりは明瞭である。外面には縦方向のミガキが残存する。内面および底部外面にはナデを施す。底部直径8.8cm。(14)は中期の年代が与えられる。

【SP-08 出土遺物】（第７図－15）　SP-08は調査区中央西寄り、平面的にはSH-01南西隅に当たる。平面では歪な隅丸方形になる。断面的ではほぼ垂直になっており、埋土の状況も勘案すると別な遺構の柱穴であった可能性が高い。(15)は支脚である。下端が欠損している。筒部は直線的にはならずに上下端が開く。外面は上端が横方向のナデ、それ以外が縦方向のミガキを全周に渡って施す。上端部は丸く納める。内面はナデおよび指頭による押圧調整が行われる。また、筒部内面には絞り目が観察できる。上側と下側では厚さが明らかに異なる。片側の端部が欠損しているため、上下は逆である可能性もある。形態的には小型器台の範疇で捉えることも可能な遺物である。上端部直径11.0cm、残存高13.8cm。後期中葉の年代が与えられる。

【包含層下層　出土遺物】（第７図－16～29）　(16)は壺の口縁である。端部上下ともに拡張する。端部外面には４条の緩い沈線を施す。(17)は壺の底部である。丸底で外面は指頭による押圧調整、内面に不定方向のハケメを施す。(18)は鉢の口縁である。端部は緩い面を有する。内面は上端部が横方向のナデ、下側は横方向のハケメが中心で一部縦方向のハケメも入る。外面は横方向のナデである。(19)は壺の口縁である。端部は上方を断面三角形に拡張している。端部外面には４条の浅い沈線が入る。頸部は直線的である。内外面ともナデ調整が施されている。(20)は高坏の坏部と考えられるが、浅鉢の可能性もある。端部は内側へ傾斜する明瞭な端面を有する。内面は縦方向の細かいミガキ、外面は端部付近が横方向のナデ、下方が横・斜め方向のハケメを施す。復元口径17.9cm。(21)は台付鉢である。口縁部が欠損する。鉢部は半球状になる。内面はナ

デ調整、外面は不明である。脚部は短く外方に踏ん張った形状である。脚端部は丸く仕上げる。調整は外面が指頭による押圧調整、鉢部との接合部は縦方向のハケメと指頭による押圧調整である。内面は鉢部との接合部がナデ、脚部が横方向の細かなハケメ、脚端部が横方向のナデ調整である。脚部直径9.0cm。(22)は甕の口縁である。端部は下方に三角形状に拡張する。端面には2条の浅い沈線が施される。短い頸部は外反する。復元口径16.0cm。(23)も甕の口縁である。端部は上方が肥厚する。口縁部は直線的に伸びる。内面は斜め方向のミガキ、外面は横方向のミガキが施される。復元口径18.0cm。(24)は甕の底部である。外面には下端部付近には斜め方向のハケメが残存する。内面には部分的に指頭による押圧調整が行われている。(25)は鉢である。端部は鋭く上方に伸びる。口縁部は歪んでいる。底部は丸底で煤が付着している。内面はナデ調整、外面は指頭による押圧調整およびナデ調整である。(26)は、鉢の口縁である。端部から5条の深い凹線が入り、間の部分には下側3段にわたって刻み目を施す。端部はナデ調整である。(27)は甕の口縁である。端部は緩い端面を持つ。頸部との屈曲部は鋭く折れ曲がる。内面はナデ調整、外面は頸部まではナデ調整、胴部はタタキのちナデを施す。(28)は短頸壺の口縁部である。端部は頂部に緩い端面を持ち、外面に若干肥厚する。胴部は直線的に外側に伸びる。胴部外面は斜め方向のハケメのちナデ調整、口縁部は内外面とも横方向のナデ、胴部内面は指ナデのち斜め方向のケズリである。復元口径11.6cm。(29)は高坏の坏部である。口縁部が強く屈曲して斜め上方に立ち上がる。屈曲部は外側に若干拡張され、そのすぐ上方には1条の凹線が施されている。口縁端部は外方に三角形に大きく拡張され、内側も若干肥厚している。端部は上方に幅広い面を有する。外面は横方向のナデ、内面は端部が横方向のナデ、端部より下部は横方向のミガキが確認できる。復元口径18.4cm。

包含層下層出土遺物のその多くが後期の遺物であるが、(24)(26)が中期、(25)が終末期の年代が与えられる。また特徴的な遺物に(21)がある。同形態の遺物は善通寺市九頭神遺跡などでも出土しており、丸亀平野の典型的な在地土器と言える[iii]。

【包含層上層出土遺物】（第7図－30～36）　(30)は鉢である。上半部のみ残存している。端部はほぼ垂直に立ち上がる。内外面とも摩滅が著しく調整が不明瞭であるが外面に若干ハケメが遺存する。端部は横方向のナデである。復元口径14.6cm。(31)も鉢である。口縁部から体部上半まで残存している。端部は折り返し外反させる。調整は内外面ともナデである。(32)は高坏脚部である。脚中央部は屈曲せずに広がる。端部は丸く収める。内面はナデ、外面は単位の粗い縦方向のミガキ、端部は横方向のナデが施される。脚端部径12.4cm。(33)は鉢の口縁である。口縁部内面に横方向のナデが施されるため、端部内面が若干肥厚する。内外面ともに横方向のナデである。復元口径20.6cm。(34)は高坏脚部である。脚中央部は緩やかに屈曲する。端部は面を有し、その端面は強い横方向のナデにより凹線状に窪む。内面は端部から屈曲部まではナデ、屈曲部より上部は指ナデによって調整される。外面は摩滅のため調整は不明である。脚端部径9.8cm。(35)は甕の底部である。平底で立ち上がりは明瞭である。内面はナデ、外面は縦方向のハケメ、底面も不定方向のハケメを施す。底部復元径8.0cm。(36)は高坏脚部である。脚部は屈曲することなく広がる。端部は丸く収める。脚部には透かし孔が1ヶ所確認できる。内面はナデ、外面は縦方向のミガキ、端部は丸く収める。脚端部径12.6cm。

これらの時期は(35)が中期、(31)が終末期の範疇で捉えることができ、かなりの年代幅が認められる。

④小結

今回の調査では、小規模な面積ながら多数の遺構・遺物を確認することができた。検出された遺構は竪穴住居などで、この位置が集落域の一角であったことがわかる。北側約40mの位置では前述のように調査が行なわれたが、今回の調査区一帯の方が検出された遺構の密度が高く、この辺りが集落の中心域であった可能性が高い。遺構の年代は出土遺物から弥生時代後期を中心に中期も含む。そのうち問題となるのがSH-01・02の先後関係である。両方の遺構埋土の土質が非常に近似していたため、遺構の重複関係の把握が困難であった。断面での確認のためサブトレンチを設定したが、両遺構の境界部分にピット（SP-22）が存在したため確実に把握することが出来なかった。調査段階では床面の標高差および平面における土質の相違により、SH-02が後出すると判断した。整理段階で両遺構出土遺物を検討し検証を行った。SH-01出土遺物のうち、(1)(2)は遺構の形態と一致しないので、SH-01の時期は(3)(4)の年代観から後期後半の時期となる。SH-02の(5)(6)も遺構の形態から混入と考え、検討対象から除外した。(8)は後期前半であるので、ここで問題となるのが(7)の年代である。(7)は後期前半から終末期までのいずれとも判断し難い。終末期だとするとSH-01との関係も矛盾がないのだが、後期前半だとすると、(8)とほぼ一致するもの、SH-01よりも前出することになり遺構の先後関係に齟齬をきたす。後者の解釈だとSH-02出土遺物と理解していた(7)はSH-01に伴う遺物となり、後期後半もしくはその相前後する時期の所産と判断することになる。本来ならば現地にて把握しておかねばならない問題ではあるが、時間的な制約もあり確定しきれなかった。両方の解釈を提示すると共に、反省点として記しておきたい。

各遺構における個々の詳細年代や旧練兵場遺跡群内での位置付けなど、残された課題は非常に多い。今後は周辺地の成果をも併せて、問題点を精査していきたい。

---

i 笹川龍一・角南聡一郎ほか2001『旧練兵場遺跡』市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 善通寺市・(財)元興寺文化財研究所

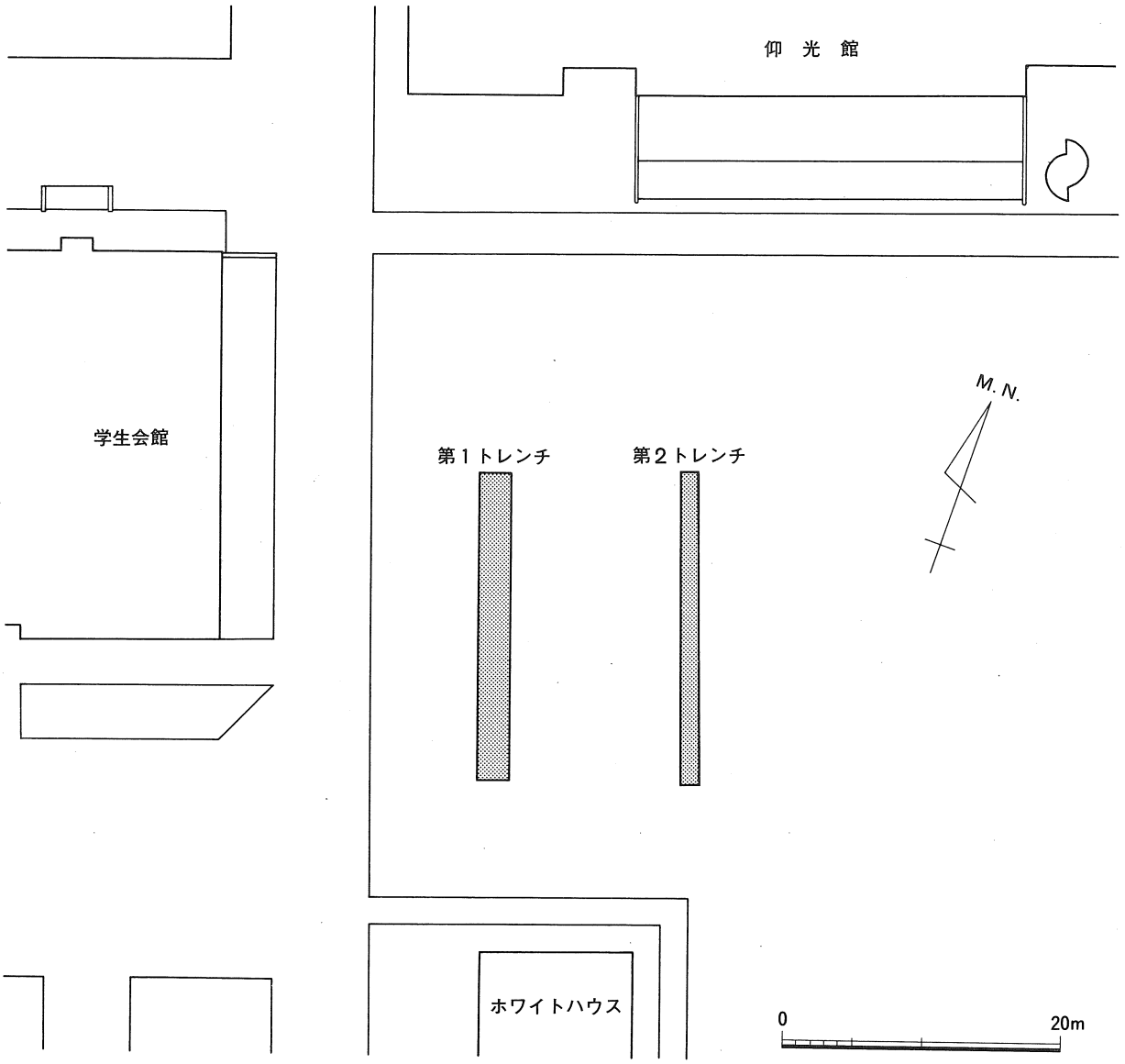
ii 森下英治2001a「善通寺市旧練兵場遺跡における弥生土器の編年と地域性の検討(上)」『研究紀要』Ⅸ 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治2001b「丸亀平野における弥生時代後期～終末期の土器編年」『第22回庄内式土器研究会〈追加資料〉』庄内式土器研究会

iii 森下英治氏ご教示

第３章　四国学院大学構内遺跡

①調査の概要

本遺跡は、善通寺市街地のほぼ中央にある四国学院大学構内に所在する。調査区は同大学構内中央やや西寄りのグランド、通称「キャンパス」西側に設定した。北側には図書館書庫、南側には法人本部棟、西側には学生会館がある。四国学院大学では、当核地付近に図書館建設の計画があるため、遺跡の有無を確認するために調査を実施した。調査期間は平成14年２月18日から２月23日、調査面積は合計約71㎡を測る。調査区は「キャンパス」西端の南北にはしる舗装道路東側5.6mの位置に南北約23m、東西2.0mのトレンチを（第１トレンチ）、さらに12.5m東側に南北約23m、東西1.2mのトレンチ（第２トレンチ）を設定した。両トレンチとも遺構面直上まで重機で掘削し、以後、人力で掘削・精査を行なった。本調査では遺跡の性格の解明に主眼を置いた調査であるため、遺構は上面で検出し平面図を作成したのみで、下部は掘り下げなかった。また



第８図　調査区位置図（1：500）

各トレンチの壁面の土層断面図を作成し、層位の把握に努めた。土層はほぼ水平に堆積し、基本的には表土を除き３層に大別できる。すなわち第Ⅰ層が黄褐色砂質土層、第Ⅱ層が灰色粘質土層、第Ⅲ層が灰黄褐色砂質土層である。第Ⅰ層は旧陸軍騎兵隊時代の盛土、第Ⅱ層は近世の耕作土(床土)、第Ⅲ層は古墳時代後期の基盤層で上面が遺構面となる。現地表面から古墳時代後期の遺構面までの深さは、約80cmから100cmを測る。

②遺構

【第1トレンチ】　第１トレンチからは、竪穴住居（SH-01)、溝（SD-01・02)、柱穴などの遺構を検出した。

SH-01　トレンチの北側から検出された。全体を確認していないため詳細は不明であるが、一辺6.5m以上の方形の竪穴住居である。北側の一辺に付随する形で竈袖と、西側に隣接して焼土が認められた。検出した竈袖に対応する反対側の竈袖は、調査区外西側に存在すると思われる。上面のみの検出のため、遺構に伴う遺物は確認していない。

溝　SD-01はトレンチ中央付近やや南側、SD-02はSD-01の南側約1.0m～1.8mの位置に平行して検出された。いずれも東西方向に流れる。SD-01は、幅3.5mを測り不定形な形状を呈する溝である。断面で見ると上層からの重複関係が認められ中近世の遺構である可能性が高い。

SD-02は幅0.2～0.3mの溝である。時期は不明である。

柱穴　複数検出されたが、埋土の質および出土遺物の年代観から竪穴住居の時期のものと近代以降の旧陸軍（騎兵隊）に伴うものに大別できる。

【第２トレンチ】　第２トレンチからは、竪穴住居（SH-02・03)、溝（SD-03・04)、柱穴などを検出した。

SH-02・03　トレンチ南側から検出した。SH-02は一辺2.2m以上の方形の竪穴住居である。SH-03と重複関係にあるため本来の規模は不明である。遺構上面の検出に留め内部は掘削しておらず、炉や竈、柱穴などは確認できなかった。いずれも遺構に伴う遺物は出土していない。

SD-03・04・05　いずれもトレンチ北側から検出された。両方とも幅1.2m前後を測る。ただし埋土内に不規則な配列で複数の柱穴が認められ、またSD-03の北側に重複関係をもって焼土混じりの埋土をもつ不明遺構（SX-01）があり、他の性格の遺構である可能性もある。SD-05はSH-02に重複する形で東西にのびる。幅は2.2mを測る。

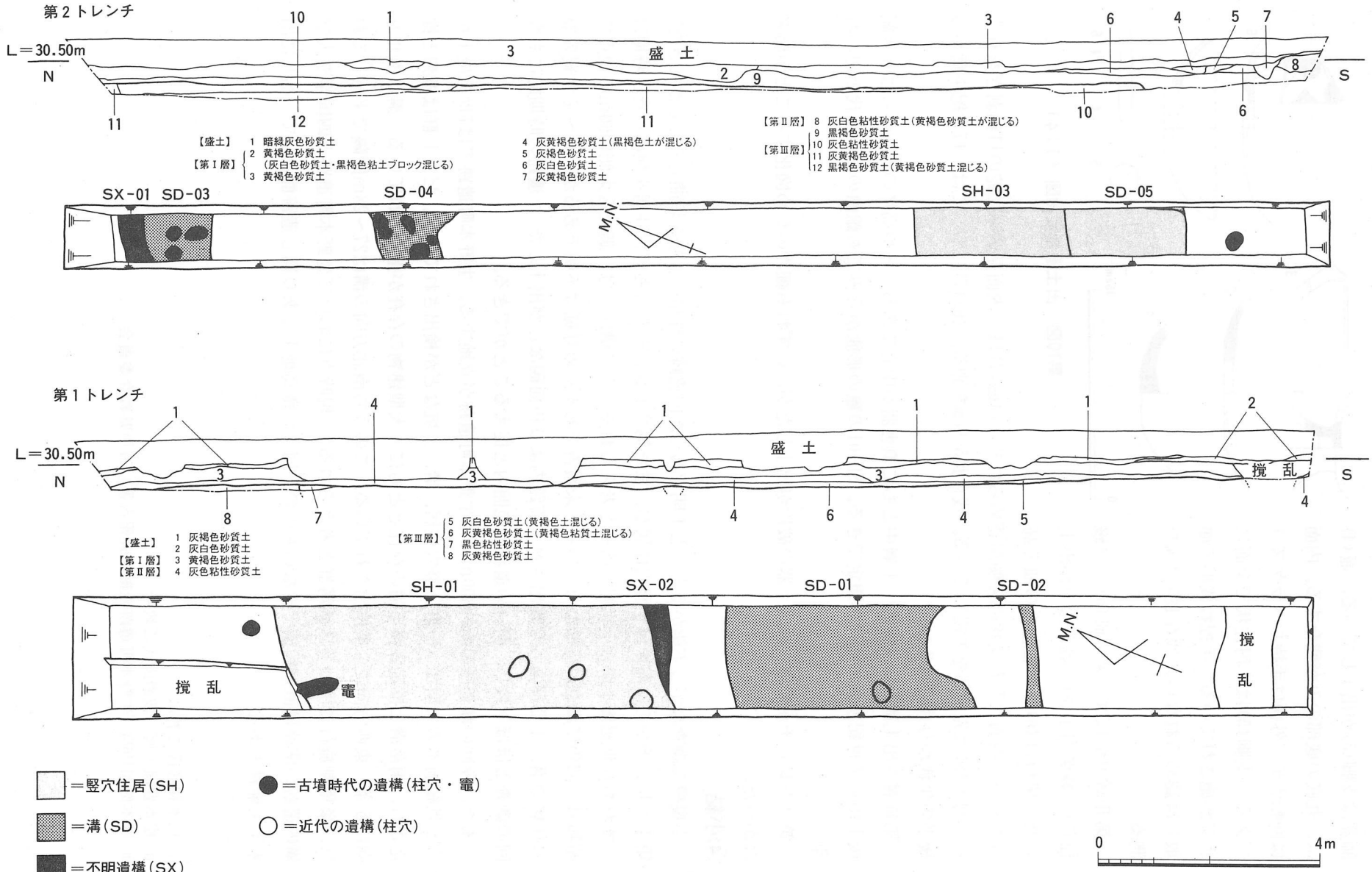
柱穴　前述のSD-03・04埋土内のもの以外にSH-02南側で１基検出した。時期は不明であるが、埋土の質などから竪穴住居に相前後する時期と思われる。

③遺物（第10図）

第１トレンチ第Ⅲ層中から須恵器、土師質土器、鉄製品などが出土した。細片が多いため図化できるものは少ない。須恵器は高坏(1)、壺(2)、甕などがある。高坏(1)は脚部のみが残存する。おそらく低脚高坏であろう。透かし孔は認められない。壺(2)は底部のみが残存する。平底で底面はヘラ切りのちナデ、内外面は回転ナデを施す。土師質土器で図化できたものは鉢(3)のみである。鉢(3)は口縁部のみが残存する。端部は断面三角形状に肥厚する。直径３㎜前後の石英や長石を含み胎土は荒い。他の遺物に比べて明らかに異質であり後世の混入と思われる。

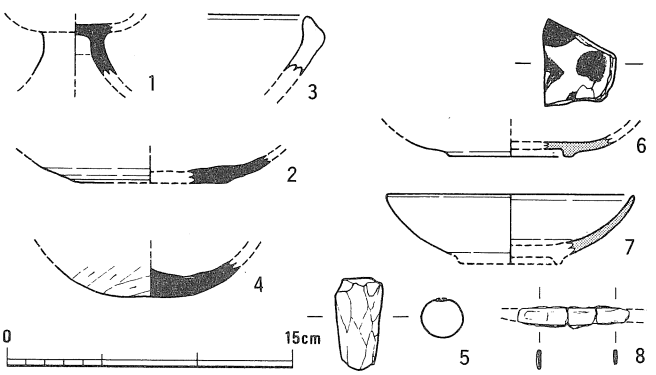
鉄製品は、錆化が著しく種別は不明である。鉄釘と思われるが、先端部が膨れており鏃などの可能性もある。

第Ⅲ層上面からは須恵器・土師器などの遺物が出土した。須恵器は壺(4)、甕などである。土



第９図　調査区平面図および土層断面図（１：100）

師器は支脚(5)が出土している。壺(4)は、丸底の底部のみが残存する。内面は回転ナデ、外面は手持ちヘラケズリである。支脚(5)は、円柱状で全面にナデが施されている。手捏ね成形で面取りは認められない。残存長5.2cmを測る。



第10図　出土遺物実測図（1：4）

第Ⅱ層中からは、染付皿(6)、白磁皿(7)、鉄製刀子(8)、鉄釘などが出土した。染付け(6)は、肥前系の皿で高台をもつ。内面に草花文状の装飾が認められる。白磁(7)は、内面見込みに蛇の目釉剥ぎを有する。刀子(8)は先端部を欠損している。残存長5.9cmを測る。(6)(7)については、17世紀中葉から後半の年代が与えられる[i]。

第Ⅲ層の出土遺物は、上面・土層中ともに須恵器が中心である。坏や高坏の形状からは6世紀後半から7世紀初頭の年代が想定できる。SH-01の竈の形態からみても齟齬のない年代と思われる。

第2トレンチからは土師質土器の破片が出土したが、いずれも細片のため図化することが出来なかった。

④小結

小規模な調査ながら実態がほとんど不明であった同遺跡の性格の一端を垣間見ることができた。第1トレンチからは竈を付す竪穴住居が、また第2トレンチからも竪穴住居を検出した。時期はいずれも6世紀後半から7世紀の所産と考えられる。大学構内では、調査区東側約60mの地点で昭和51・52年に調査が行なわれている。未報告であるため詳細は不明であるが、6～7世紀の竪穴住居や溝、土器溜まりが検出され、流路内より円面硯などが出土した[ii]。遺跡の時期的にも今回の調査とほぼ一致し、同一の遺跡の範囲内と捉えることができる。

また、今回の調査区の南約300mには生野本町遺跡が立地する。生野本町遺跡では7世紀後半から8世紀前半の大型ピット群、竪穴住居、溝、土坑などが検出されている。ピット群は柵列と推定され、雨落溝と推定される溝の存在とともに、大型建物の存在が指摘されている。溝は南北方向に6条、東西方向に3条検出されている。このうち南北方向の溝は27～28m間隔で平行しており、条里制施行に関わる区画溝群と考えられる[iii]。現時点において生野本町遺跡と四国学院大学構内遺跡の関連は直接指摘できないものの、同一の微高地上にあり同じ遺跡群として一括りに出来る可能性もある。

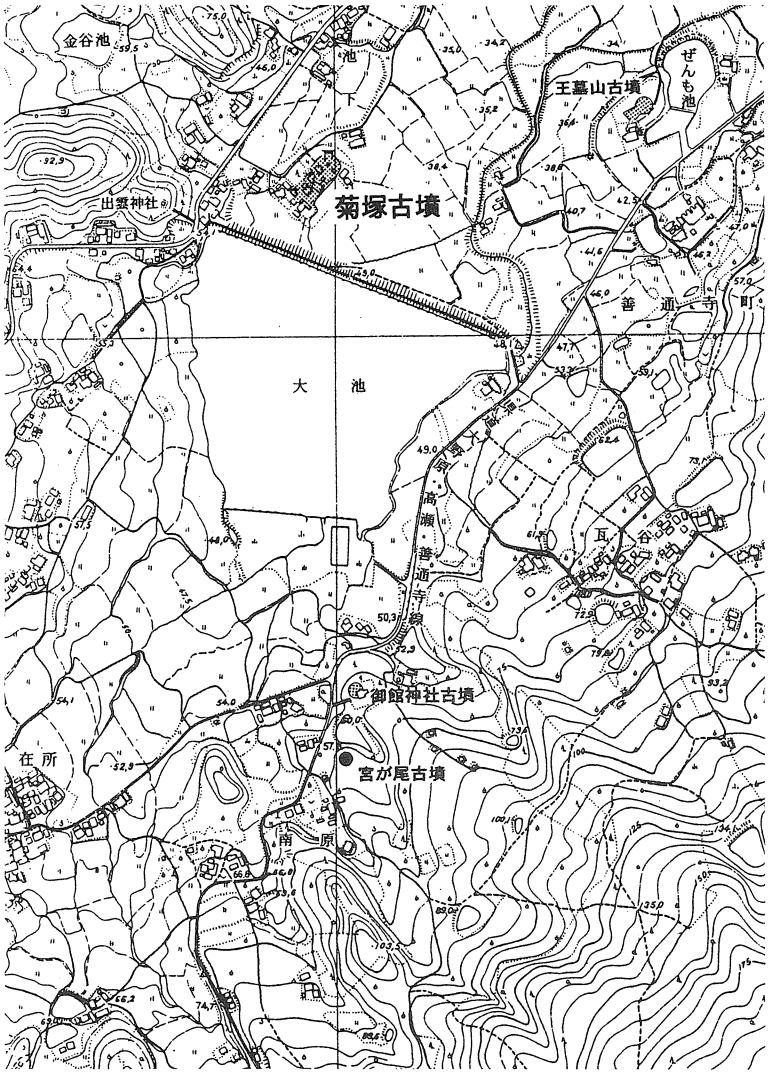
---

i　松本和彦氏ご教示。
ii　松本豊胤・岡　敦憲両氏ご教示。
iii　國木健司1993『生野本町遺跡発掘調査報告書』香川県教育委員会

第４章　菊塚古墳

① 調査の概要

善通寺市街地から南西には有岡の里と呼ばれる低丘陵地帯が広がる。有岡地区は弘田川上流域で、この地を統治していた歴代首長の前方後円墳が集中する地域として有名である。この地は古代から聖域視されていたようで、集落遺跡が極めて少ない反面、青銅器埋納遺跡や祭祀遺跡、そして多くの古墳の存在が知られている。



第11図　周辺主要古墳位置図（1：10,000）

この地域は五岳山の一角である香色山、筆ノ山、我拝師山で北部から南部を、そして南部を大麻山で限られているため、西の平野方向のみが開ける地形となっている。それらの山々の尾根上には前期古墳が点在し、標高50～80mの山裾部には後期から終末期の群集墳が密集している。また、舌状に平野部に伸びる小丘陵上を中心に多数の前方後円墳が残されている。

菊塚古墳はこの前方後円墳群のうち最も西に位置しており、丘陵上ではなく平地に独立して築造されている。古墳は開墾や住宅建設に伴い前方部の大部分が消滅しており、菊理姫命を祀る菊主神社がある後円部のみが辛うじて残存している状態であるが、その後円部でさえも周囲は大きく削平され地形の改変が著しい。しかし航空写真や地形図を見ると、古墳周囲の周庭帯と推定できる地割りが明瞭に確認できる。この部分は墳丘南側では西から東に向かって階段状に低くなっており、その比高差は最大で約0.7mを測る。墳丘の主軸は南西―北東方向を向いている。

墳丘の全長は、調査前の推定で約55m、後円部直径約35m、周庭帯の全長は約90m、最大幅約70mを測り、これは丸亀平野における当該期の古墳でも有数の規模を誇る。今年度調査を行なうまで主体部は調査されておらず、中期古墳と後期古墳の両説が並存していた。

有岡地区の水田域は緩やかな傾斜地にあるため、近年ほ場整備が盛んに行なわれており、平成

12年度に菊塚古墳周辺での工事が計画された。この工事では周庭帯の跡と見られる地割りへの影響が懸念されたため、平成12年度事業として発掘調査を実施した。この結果、古墳周辺の周庭帯が確認できた。また後円部裾の一部が検出され、後円部直径が約38mになることも判明した。古墳の築造時期については、埴輪が出土しないことなどから6世紀後半以降と推測された[i]。

古墳の墳丘は近年土砂の流出が著しく、墳頂の神社に通じるコンクリート製舗装路の下部が一部空洞化するなど、安全面からも改修が急務であった。現状のまま放置すると墳丘自体が崩壊する恐れがあったため、市教育委員会では遺跡の重要性を考慮し関係諸機関と協議の上、埋蔵文化財調査事業として保存を前提とした遺構の確認調査を行なった。併せて後円部墳丘の測量調査も実施した。調査区は後円部墳頂部に設定した。調査面積は10.2㎡を測る。

② 遺構

【後円部の測量調査】

後円部墳頂部　現在、墳頂部盛土の大部分が削平されており、平坦面が形成されている。墳頂部には菊理姫命を祀る菊主神社が建てられ、コンクリートで固められている。また平坦面南端には、2.7m×1.7mの板石が露出しており、この石材が天井石の一部であった可能性がある。

後円部墳裾　全体的に急な崖となっており、墳丘の流出が著しい。中でも墳丘裾南東側の平坦面は、以前に住宅が建っており、そのため特に改変を受けている。南西側は本来、前方部が続いているはずであるが、現在、前方部は宅地となっており、舗装路がくびれ部に設けられている。このため、この道路に沿って後円部も改変を受けている。北側・北東側は、際まで畑地となっており、南東・南西側ほどではないがかなり流出している。以上のように後円部墳丘裾は現状においてほぼ全周にわたって削平されており、測量調査の成果からは墳丘裾部を確定することはできない。

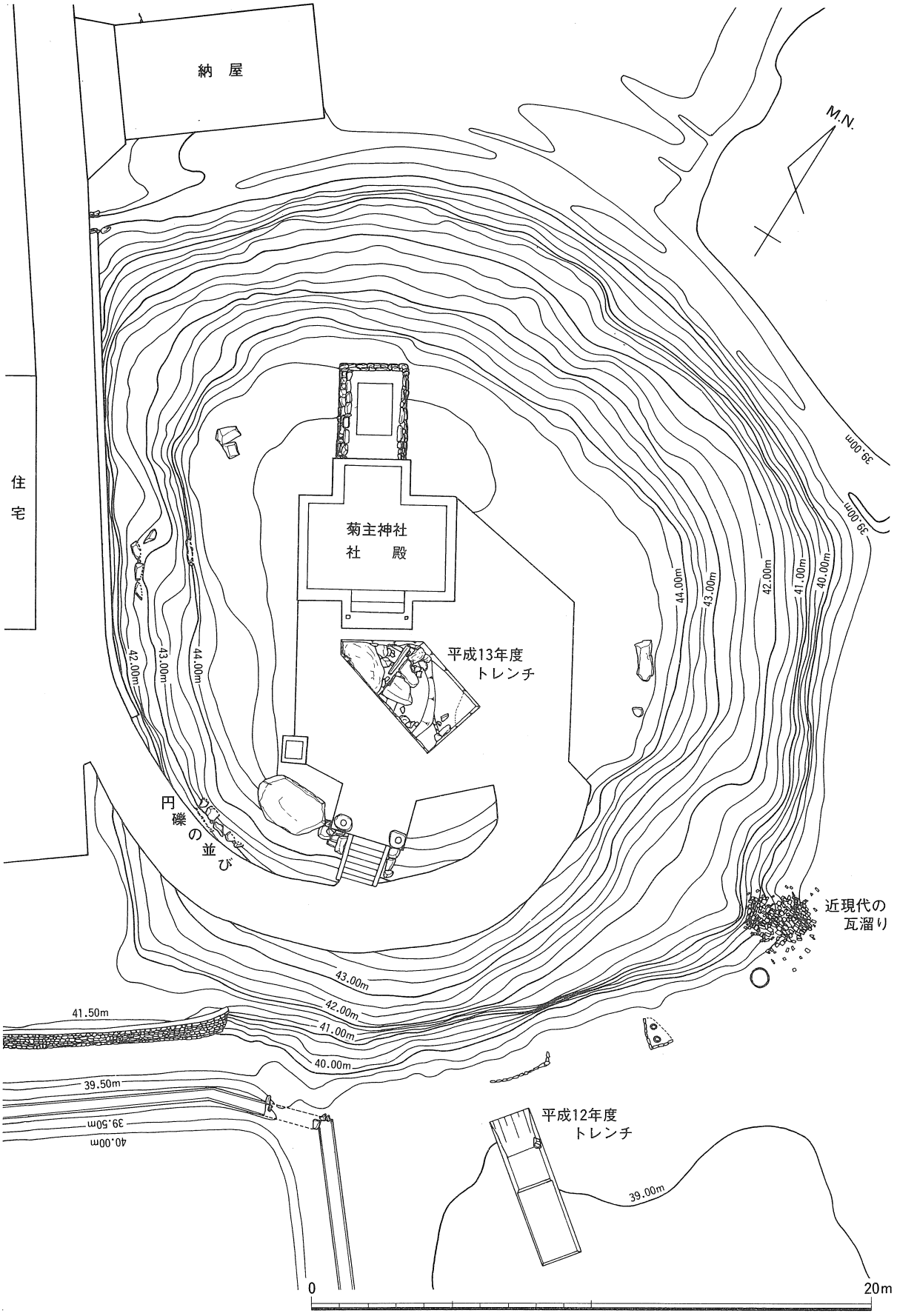
後円部テラス　墳丘東側は比較的等高線が弧状に巡っており、ある程度墳形をとどめているものと思われる。この箇所は標高41.75m付近に傾斜変換点が存在し、そこから43.00m付近にかけて等高線の幅が広くなっており、この範囲にテラスが存在していたことが伺える。このテラスは北側においても確認でき、標高42.00mから43.00mにかけて等高線の間隔がやや広くなる。

これらのことから、本墳は二段築成の前方後円墳であったと判断できる。なお、北東側および南東側は流出の度合いが大きく、コンターラインの乱れが大きい。

また墳丘南側、標高43.00m付近に一辺50cm前後の石材が幅約2mにわたって散乱しており、その下側には直径5cm前後の円礫がほぼ水平に並んでいる。この状況から推測すれば、付近が羨道もしくは前庭部であった可能性が高く、石室はほぼ真南に開口していたものと思われる。

測量調査の成果を元に後円部の復元案を提示したい。本墳の現状から後円部の中心を求めると、ほぼ奥壁の中央付近に相当する。今回の調査では石室の規模が確認できた訳ではないが、天井石の規模から推測できる奥壁の中心を後円部の中心として計測した。それによると後円部径は現状で約32mとなる。ただし、平成12年度の調査において、第3トレンチで後円部墳裾が確認されており、それをもとにして後円部径を復元すると約39mとなる。これは王墓山古墳（後円部直径28m）よりかなり大きい[ii]。墳頂部の平坦面は18m×16m、比高差は現状で5.8mを測る。

以上のことより、菊塚古墳は後円部径39m、後円部高5.8mの二段築成の前方後円墳と推定できた。調査対象が後円部に限られていたため、前方部の形状・規模については検討しえなかった。



第12図　後円部墳丘測量図（1：200）

【主体部の確認調査】　本調査では主体部の形態が不明であったため、墳頂部に南北2.5m、東西3.0mの平面長方形の調査区を設定し掘削した。その結果、調査区西側で壁体を検出し横穴式石室であることが判明した。そのため、調査区を西側に社殿と平行する形で平面三角形に拡張した。調査面積は計10.2㎡を測る。その結果、玄室の奥壁および東側壁の一部、そして王墓山古墳に次いで九州以外で２例目の発見となる石屋形の一部が検出された。また転落した天井石や壁体石材も確認した。

石室　後円部中央に構築されている。検出した側壁の並びからほぼ真南に、換言すればくびれ部方向に開口していたと思われる。

奥壁　東側の一部分のみ検出した。調査では上部の２段分しか確認できなかったが、石屋形の残存状況から床面付近まで遺存していると思われる。検出した奥壁は側壁に比べてやや小振りな石材を用いている。石材はいずれも安山岩である。

左側壁　奥壁から４石目まで検出した。壁体はそれぞれ上面から２段目まで検出したが、下部にもさらに壁体が遺存している。壁体の石室内側は自然面ではあるが、平滑な面を意識的に使用したと考えられる。用石法は大部分が小口積みにして、壁体の安定を図っている。しかし奥壁側の１石のみは、石材の長辺を石室内側に使用している。このため別の石材を控え積みとして用いていた。一番上段の石材の上端は標高が揃っていないが、下段の石材上端は標高41.60m付近でほぼ揃っている。上・下段側壁の間には安定化を図るためか、小型の礫が充填されていた。石材は奥壁側の１石が角礫凝灰岩である以外は安山岩である。ただし、転落石材の中には花崗岩もみられる。

天井石　石室内からは、２石転落した状態で検出された。長辺約2.2m以上、短辺約1.1m以上の大きな石材である。材質は花崗岩である。上面は弧を描く自然面だが、下面は平滑な面を持つ。天井石と直下の埋土の間には土砂が堆積していない空間があった。

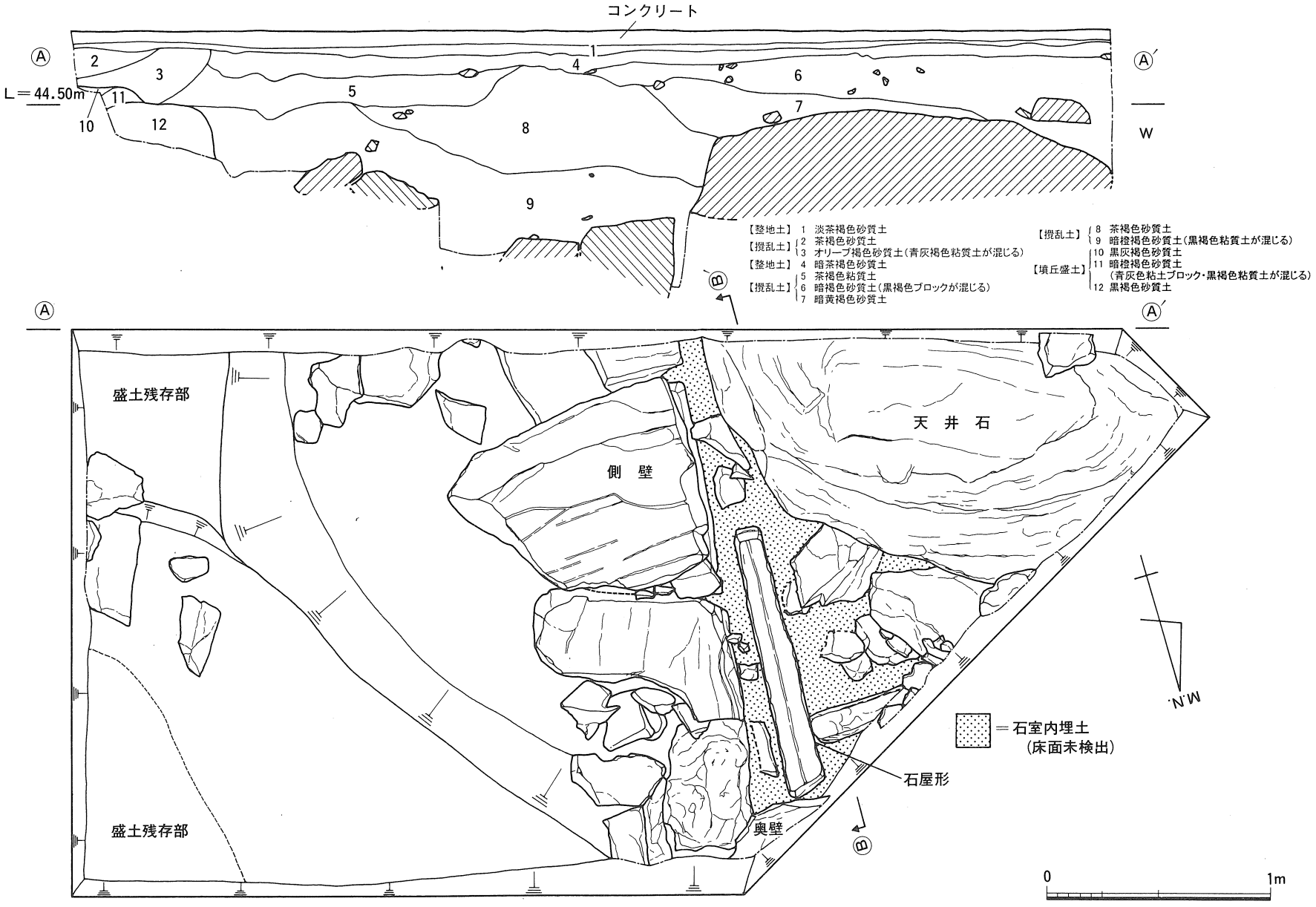
石屋形　奥壁および左側壁側に寄せるように、平面Ｌ字状に片側の小口板と側板を検出した。両方とも１枚の板状の石材で、材質は凝灰岩である。左側壁側の側板に奥壁側の小口板が取り付く形状である。現状では部分的かつ上面のみしか検出していないため、全体像は不明である。左側壁側の側板は側壁にほぼ平行し、垂直に立っている。上面で長さ123cm以上、厚さ13～15cm以上、高さ115cm以上となる。奥壁側の小口板は長さ45cm以上、厚さ15cm以上、深さ115cm以上を測る。土圧のため南側に若干内傾している。調査面積の制約から床面までの検出ができなかったため、数値は変動する可能性が高い。小口板の上面には内側に人為的な段が付く。

また、調査区南壁の土層断面図を作成し、石室上面の層位的な検討を行なった。その結果、調査区内の大部分は盗掘を受けていることが判明した。盗掘坑は幾層にも分層でき複数回にわたって盗掘を受けたと思われる。但し前述の通り天井石が水平に落ち込んでいたため、盗掘を受けることなく床面が残存している可能性がある。今後の調査成果に期待される。なお、石室掘形は検出できなかった。

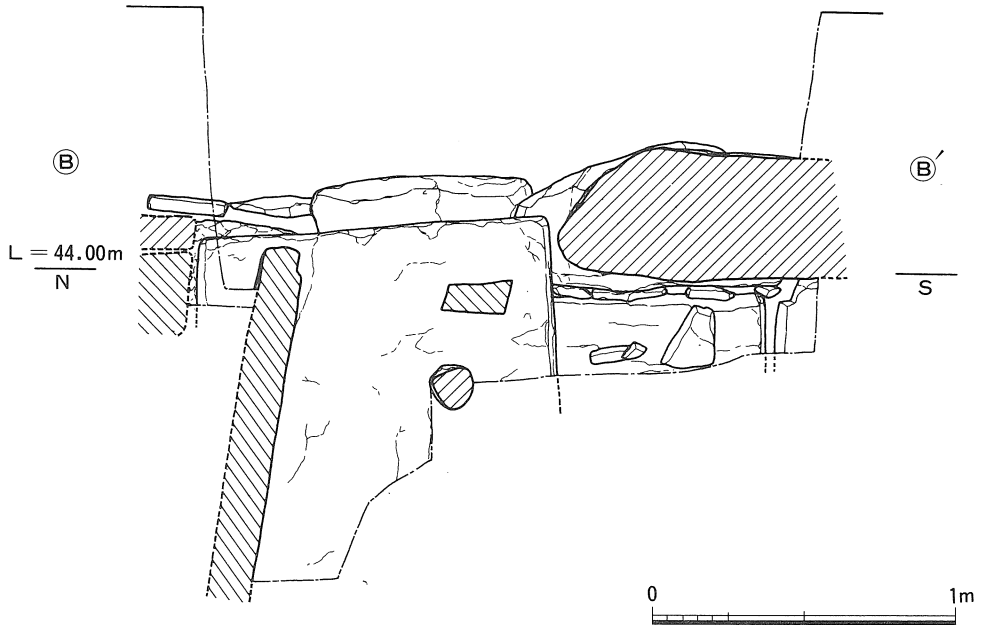
③遺物

出土した遺物は上層の攪乱土から鉄釘と推定される鉄製品残欠が1点出土したのみで、直接古墳に関係する遺物は出土していない。

この他に後円部墳丘上の各所から、瓦片など近世以降の遺物を採集した。これらは墳頂の菊主神社に伴うものと推定される。これらの内、３点を図示した。(1) (2)は近世の軒丸瓦、(3)は土



第13図 主体部検出範囲平面図および土層断面図（1：25）



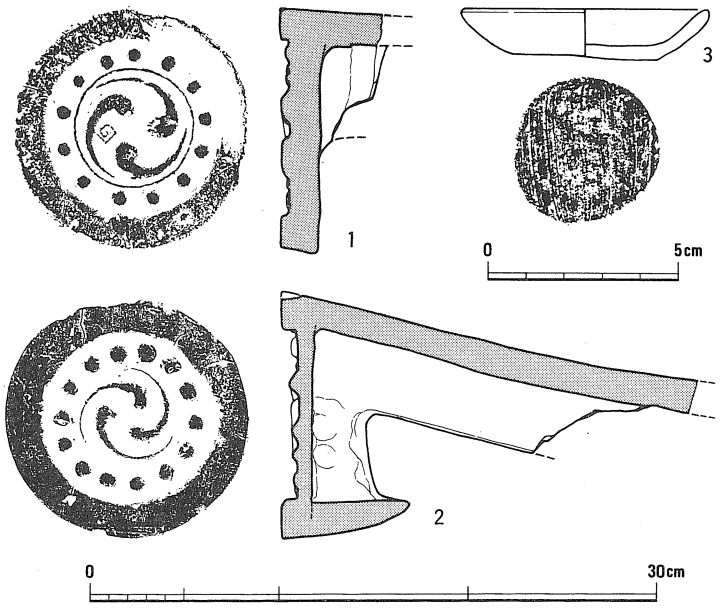
第14図　主体部検出範囲側面図（1：25）

師器小皿である。(1)は三巴文軒丸瓦である。丸瓦部は外縁部の1/4程度が欠損している他はほぼ完存している。三巴文の周囲には圏線が巡る。巴頭部は小振りであるが明確である。巴尾部はさほど長くはならず、隣接する巴頭部の付け根付近で終わる。珠文はやや小振りで計13個ある。巴尾部の１つに隣接して陽刻が認められる。丸瓦部は大部分が欠損している。内面に接合痕が残存する。(2)は三巴文鳥衾である。丸瓦部はほぼ完存している。巴頭部は(1)と比較してやや小振りである。巴尾部はやや長く、隣接する巴尾部の半ば付近まで伸びる。珠文はやや大形で計14個ある。(3)は完形の灯明皿である。内面には使用時の煤が残存している。端部は外面にごく弱い面を有する。口縁部は直線的に外方に立ち上がる。底部は平底である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。底面は静止糸切りの後、一部指頭による押圧調整が観察できる。(1)(2)について高松城の編年に準拠すると、(1)は17世紀後半～18世紀前半、(2)は(1)にやや後出する時期と思われる。(3)についてもおおむね18世紀代の範疇に収まるものと思われる[iii]。墳頂部の菊主神社の創建年代については不詳であるが、少なくとも江戸時代中期には瓦葺きの社殿が存在し、地域の信仰を集めていたことが推測できる。

④小結

今回の調査では、従来不明であった主体部の具体的な構造が明らかになった。主体部は横穴式石室で規模は石室長2.1m以上の規模を測る。残存する石室高は、1.4m以上を測る。検出した側壁は東側のみで石室幅は判断し難いが、天井石と推定される転落石材の長さが2.2m以上あることから、それ以上の規模は確実にあると思われる。

今年度の調査における最大の成果は、石屋形が原位置を保って発見されたことである。石材の状態も非常に良好であり、具体的な構造の復元が可能と思われる。石屋形は肥後地方を中心に九州一帯に分布するが、中四国では王墓山古墳に次いで２例目の検出例である。本墳の以後の調査成果いかんによって丸亀平野の首長墳の位置付けや、当時の対外交流の具体像に迫れる可能性が大きい。今後の調査に期待したい。



第15図　墳丘上表面採取遺物実測図（1，2＝1：4　3＝1：2）

---

i　笹川龍一2001『鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告』善通寺市教育委員会
ii　笹川龍一ほか1992『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会
iii　佐藤竜馬氏ご教示。
　乗松真也編2001『浜ノ町遺跡　高松城跡（西の丸町）　西打遺跡』香川県教育委員会・
　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

【主要引用・参考文献】

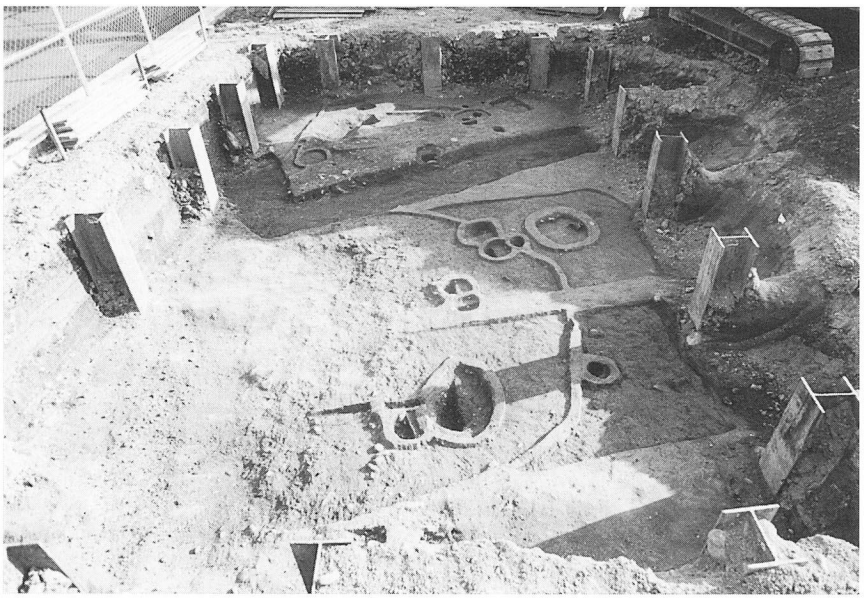
『善通寺市の古代文化』 矢原高幸・善通寺市 1973年
『善通寺市史・第一巻』 善通寺市 1977年
『中の池遺跡発掘調査報告書』 丸亀市教育委員会 1982年
『香川叢書・考古篇』 香川県教育委員会 1983年
『王墓山古墳調査概報』 善通寺市教育委員会 1983年
『五条遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会 1983年
『仲村廃寺発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会 1984年
『彼ノ宗遺跡』 弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 善通寺市教育委員会 1985年
『仙遊遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会 1986年
『中村・乾・上一坊遺跡』 四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第一冊 香川県教育委員会 1987年
『矢ノ塚遺跡』 四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第三冊 香川県教育委員会 1987年
『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会 1988年
『稲木遺跡』 稲木遺跡発掘調査団 1989年
『仲村廃寺』 善通寺市教育委員会 1989年
『稲木遺跡』 四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第六冊 香川県教育委員会 1989年
『永井遺跡』 四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第九冊 香川県教育委員会 1990年
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会 1992年
『御館神社古墳発掘調査報告』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 善通寺市教育委員会 1993年
『青龍古墳発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 善通寺市教育委員会 1994年
『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 善通寺市教育委員会 1995年
『香色山山頂遺跡群発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 善通寺市教育委員会 1996年
『旧練兵場遺跡Ⅲ』 平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告 香川県教育委員会 1996年
『旧練兵場遺跡』 国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第1冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳) 保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会 1997年
『旧練兵場遺跡』 国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第2冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1998年
『山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書』善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘

調査報告書5　善通寺市教育委員会　1999年
『鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書』　善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6　善通寺市教育委員会　1999年
『旧練兵場遺跡』　市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　善通寺市・(財)元興寺文化財研究所　2001年
『旧練兵場遺跡』　特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　善通寺市・(財)元興寺文化財研究所　2002年

図　　版

図版 1

1．遺構検出状況
（北から）



2．遺構面検出状況
（北から）

3．SH-03断面
（西から）

1．焼土坑 1（北から）

2．土器15出土状況
（北東から）

3．調査風景

図版３

1．調査前風景
（南東から）

2．第１トレンチ全景
（北から）

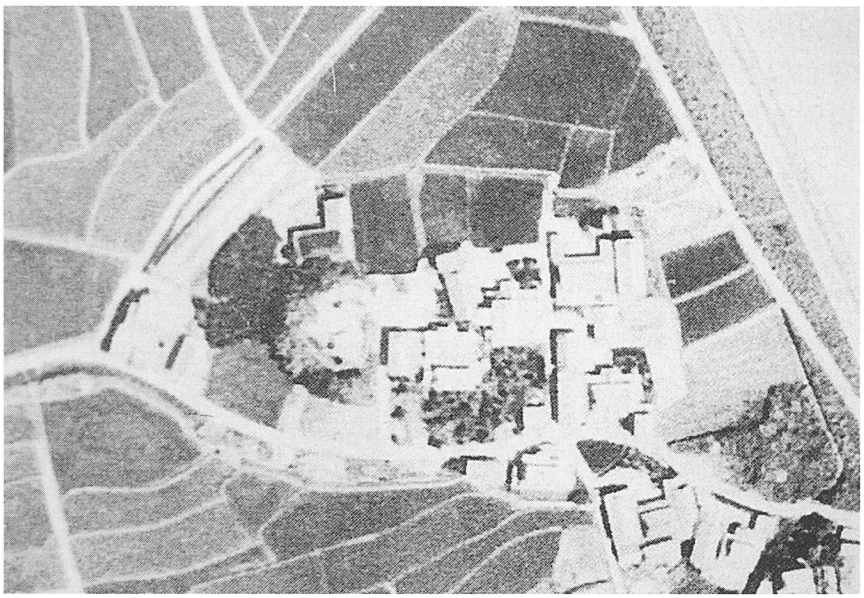
3．第１トレンチ土層断面（北西から）

1．SH-01竈検出状況
（西から）

2．第２トレンチ全景
（北から）

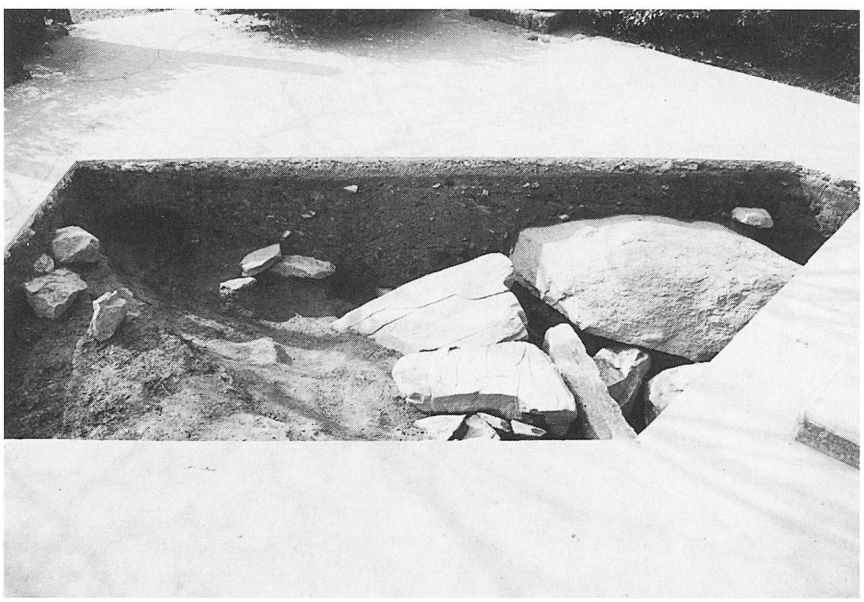
3．第２トレンチ
SD-03・SX-01検出状況
（西から）

図版５



１．菊塚古墳遠景
（航空写真）

２．遺頂部調査前風景
（東から）



３．調査区全景
（北から）

1．玄室検出状況（南から）

2．玄室検出状況（西から）

図版７

1．玄室検出状況（北から）

2．玄室奥壁北東側コーナー部分検出状況（南西から）

１．盛土残存状況
（左個所・北から）

２．円楪検出状況
（南から）

３．調査風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぜんつうじしないいせきはっくつちょうさじぎょうにともなう まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書　名	善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	7
副書名	旧練兵場遺跡　四国学院大学構内遺跡　菊塚古墳
シリーズ番号	
編著者名	笹川龍一・海邉博史・中里伸明
編集機関	善通寺市教育委員会　文化振興室
所在地	〒765-0013　香川県善通寺市文京町二丁目１番４号
発行年月日	平成14（2002）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうれんぺいじょう 旧練兵場 いせき 遺跡	善通寺市仙遊町	37204	00041	34°13′33″	133°46′20″	20020213～ 20020219	46㎡	善通寺市内遺跡調査事業 （遺跡確認調査事業）
しこくがくいん 四国学院 だいがくこうない 大学構内 いせき 遺跡	善通寺市文京町		00515	34°13′12″	133°47′05″	20020218～ 20010223	71㎡	
きくづかこふん 菊塚古墳	善通寺市善通寺町字大池東		00012	34°12′35″	133°46′15″	20020311～ 20010329	10.2㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
旧練兵場遺跡	集落	弥生時代 近代	竪穴住居・土坑・溝	弥生土器	竪穴住居などの遺構が密集して検出された。
四国学院大学構内遺跡	集落	古墳時代 中世	竪穴住居・溝・焼土坑	須恵器・土師器・鉄製刀子	造り付け竈が付随した竪穴住居などの遺構を検出した。
菊塚古墳	古墳	古墳時代 近世	横穴式石室	瓦・土師器	大型横穴式石室の玄室を確認した。石室内部からは九州以外では２例目となる石屋形を検出した。

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書７

旧練兵場遺跡
四国学院大学構内遺跡
菊塚古墳

平成14年３月31日

発行　善通寺市教育委員会
香川県善通寺市文京町2-1-4

印刷　四国工業写真株式会社